

---

# 神ノ音、鬼ノ月

万華鏡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神ノ音、鬼ノ月

### 【Nコード】

N4138Y

### 【作者名】

万華鏡

### 【あらすじ】

『超』がつく程貧乏だった私。それでも日々の生活は満ち足りていた。

幸せだった。・・・なのに、

“運命”はそれを許してはくれない・・・。

——様々な不思議が眠る本家

人々から受ける負の視線

隠され続けていた秘密

「神」と「鬼」、二つの力  
なくしたキオク・・・  
もう、後には戻れない――

## 登場人物（前書き）

ほんのりネタバレあります。

## 登場人物

く 神ノ一族 く

○神成神音 しんじょうかのん

後、神神音にじとなる。

15歳・女

主人公。

短めの黒髪に黒い瞳。

料理は得意でしっかりもの。  
以外に勇ましいところも。

○神志音 ししおん

15歳・男

神音の双子の兄。

髪と瞳はダークブラウン。

神音以外はどうでもいい。

琉音と璃音には特に厳しく、冷たい言葉を浴びせることもしばしば。

基本性格は大人しめ。

毒舌。

○神琉音 しゅうおん

17歳・男

神音・志音の兄で、璃音の双子の兄。

金髪に青の瞳。

神音を溺愛。

○神璃音 りおん

17歳・男

神音・志音の兄で、琉音の双子の弟。  
銀髪に赤の瞳。  
神音を溺愛。

く鬼ノ一族く

ぬく族いと  
○鬼月

15歳・男

鬼ノ一族の時期当主。  
栗色の髪に茶の瞳。  
超俺様。

## 第一話 突然の訪問と

『いいかいよく聞くんだよ・・・お前にはこれから苦しいことやつらいことがたくさん起きるだろう。だけど、それに屈してはいけないよ。今のその心を失っていけない・・・大丈夫。お前には周りにたくさん支えてくれる人たちがいるよ。なぜならお前は。

・・・――なのだから・・・・・・・・・・』

・・・あの時、おばあちゃんが残した言葉。その意味を私はまだ知らない。それが嘘か、本当なのかもわからない。これからも、そうして過ごしていくのだと思っていた。

なのに。

ある日を境に、私の世界のすべてが変わってしまった・・・。

唐突に。

残酷に・・・。

あの言葉の意味は何？

——私は……何なんだろう——

見慣れた道を少女、神成<sup>しんじょう</sup> 神音<sup>かのん</sup>は歩いていく。……とても重い足取りで。一週間前、おばあちゃんが亡くなった。とても悲しかった。私には、両親がいない。顔すらも知らない。……いや、本当は思い出せないだけなのかもしれない。昔の記憶がとても曖昧なのだ。いつだったか思い出そうとしたとき、とてつもなく頭が痛くなったときのことを今でも覚えてる。だから、もう思い出そうとするのは諦めた。辛いときはいつだっておばあちゃんがいてくれたから、頑張れた。

………なのに。

そのおばあちゃんもついにいなくなってしまったのだ。

今はもう一人。辛い私は家事とかは得意なので、生活は今のところ大丈夫だが……。

「神成さん。それあそこに運んで！」

神「はい！」

このままでは生活費がヤバいかもしれない。今までもバイトはしていたんだけど、今ではもう2個増やして何とか生活している状態だ。……それでも、ほかの人達には頼りたくないと思う。

そして帰り。私はまたいつも通りの道を歩いて帰ってく。．．．．．  
・ ゆっくりと、歩いてく。どうせ、家に帰っても誰もいないから。

．．．．．。

それからしばらく歩いて、帰り道の途中にある商店街に差し掛かった。この商店街は好き。もう夕方だったのに、とても賑やかで・  
・ 楽しい。

「神音ちゃん！バイトかい？お疲れさん。これ、あまりものだけど、よかったらもってお行き！！」

神「いいんですか？ありがとうございます。」

このおばさんは、私がまだ幼いころは特に、お世話になった人だ。よく遊んでもらっていた。とってもいい人。今でも、何かとおばあちゃんがいなくなつて一人になった私のことを心配してくれて、さつきみたいにいるいろんなものをくれたりする。人の思考なんて案外単純なもので、少しだけ私の足取りは軽くなった。

神「．．．．．？」

あれから数分。やっと家にたどり着いたと思っていたら、家の前に誰かがいる。こんなこと滅多にないのに．．．。

誰だろう．．．？

警戒しながらゆっくり近づいていくと、向こうも私に気づいたみたいで、私の方へ振り返った。

ダークブラウンの髪と瞳。多分高校生くらいの・・・整った顔つきをしている男の人。私の知らない、人・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・神音？」

神「・・・・・・・・・・え・・・・？」

なんで私の名前を・・・・？

神「あの・・・・誰、ですか・・・・？」

私は、警戒しながら目の前にいるこの青年に問いかけた。足も止まっていた。無意識に。

・・・・・・・・この人は、危険。

私の中にある本能がそう告げている。自然と足が一步下がっていた。

「・・・・・・・・僕は志音。神音・・・君を“迎え”に来たよ。」

そうして青年、志音は一步一步、少しずつ私に近づいてくる。それに比例して、私は少しずつ後ろへと下がっていく。そんな私の行動を見て、志音は困ったような笑顔を浮かべた。

志「・・・・・・・・神音。そんなに怖がらないで。何もしないから。」

そういう志音は、本当に何もしないのだろうと思った。だって違う。これはそういう恐怖じゃないから。

．．．ついて行ってはいけない。  
だって、ついて行ったその先には．．．．．。

神「．．．．．っ!!」

私はナニかを思い出しかけたが、それは突然の頭痛によって遮られた。

志「神音．．．大丈夫かい？」

神「!?!?!?!大丈夫です．．．!!」

先ほどの突如の頭痛によつて俯いていると、いつの間にか志音は私のすぐ傍まで来ていた。もちろん、失礼は百も承知だけど私はすぐに距離をとった。

「来ナイデ」

「近ヅイテハイケナイ」

それは、強い．．．拒絶の言葉。

さつきから、ずっとずっと私の頭の中に響いてくる。

その言葉にボーっとしながらも、できる限り相手を睨みつけていると、志音は盛大にため息を吐いた。

志「まったく・・・しょうがない子だね。」

そっついながら志音は再度私のほうへと歩いてきたので、私はまたさつきと同じように後ろへと下がろうとした。  
だが・・・。

神「・・・・・・・・っ!？」

それは叶わなかった。足が・・・体が動かない・・・なんでっ!？  
そうしている間に、志音はすぐに私の目の前へときてしまった。

志「ごめんね、神音・・・。」

そっいつて志音は私の頭に手を翳した。

神「・・・・・・・・えっ!？」

瞬間、私の思考は途切れた。

『——・・・大丈夫か？』

だ、れ・・・？

『——！！ええ、会いたかったわ・・・』

この人たちは・・・？

姿がはつきりと見えない・・・見ようとすればするほど、あの失くした記憶を思い出そうとした時みたいに靄がかかる。

頭痛が、吐き気が・・・ひどくなっていく。

『また——かな・・・』

『・・・ああ、きっと——うそ』

あ・・・これ、は・・・。。。

ゆ、め・・・？

「——ん……神音!？」

突如私は、誰かの大きな声によって目を覚ました。

神「……………っ!!？」

……………でも、そこには知らない人たちがいて……………。

「ああ……………よかった。」

「すっごい魔されてたから心配してたんだぞ？」

え……………ええ、と……………。

神「あの、だ……………誰、ですか……………?」

「ああそつえば……………そうだったな。」

「俺が璃音で、こっちが琉音だ。因みに見ての通り双子だな。俺が弟で琉音が兄。……………神音、お前のお兄ちゃんだぞ。」

ええと……………金髪に青い瞳の人が琉音<sup>るおん</sup>で、銀髪に赤い瞳の人が璃音<sup>りおん</sup>で。……………?

神「……………え、あの……………でも私、兄弟いなかったと思うんですけど……………」

というか私にはおばあちゃんしかいなかったし。今は独りだけ……………。  
私がそついうと、琉音と璃音は少しだけ悲しそうな顔をした。

琉「……………」

璃「……琉音。神音には、これから覚えていつてくれたらいいんだから、な？」

琉「……ああ。そうだな。」

なんとなくしんみりムードになってしまつて、私のせいなのかと謝ろうとしたら、いきなり和室の障子戸が開いた。

「……兄さんたち、何二人して辛気臭い顔してるの。邪魔くさいんだけど。」

神「あ……。」

そうして入ってきたのは、志音だった。私の方へと視線を移した志音は、表情を一変させて柔らかく笑った。

志「神音……よかった。目が覚めたんだね。」

どんな原理を使ったのかは分からないけど、私を気絶させたのは間違はなく志音なのに……と、思ったのは言うまでもないだろう。私は私の兄だと言い張る三人の青年たちに、まずことの説明を求めようと思った。なるべく隙を見せないように、冷静になつて。もちろん、警戒も怠らずに。志音に触れられてもいないのに気絶させられた事実、私はこの人たちが只者ではないことだけはわかっていた。

……私は物心ついた時から靈感が強いらしく、幽霊なんて結構生で見てきたし、人の放つ気みたいなものもなんとなく感じ取れるのだ。ここにいる三人は、今までに見たことがないくらい強い気を発している。痛いくらいに感じ取れる。

神「……まず、説明してください。あなた達はいつたいなんなんですか？なんで私を……こんなところに？どうして「ストツプ。」」

言いたいこと、聞きたいことをすべてぶつけようとしたら、志音に遮られてしまった。

志「神音、まずは水を飲んで落ち着いて。あとその敬語もやめてほしいかな。……話は、ちゃんとするから。」

まだ全部は言えないけど……と。そう困ったように言った志音に、私は何にも言えなくなった。……なんだか、こっちが悪いことしている気分だ。全然違うのに……。ずるい。

琉・璃「……おい志音。」

ハモった。誰がってその……先ほどの双子たち。やっぱり双子なんだなあ。ちよつと忘れかけていたことは心のうちに秘めておこうとひそかに思いながら、私と志音はその声の主たちの方へと視線を移した。

志「何？今忙しいんだけど。」

志音は、心底面倒そうな顔をしてため息を吐きながら二人に言葉を投げかけた。

琉「さつきから俺たちのこと無視しやがって……!!」

璃「というか、兄に対してその態度はねえだろ!？」

志「本当のこと言っただけだよ。あと、話の腰折らないでくれる？迷惑。」

琉・璃「んだとお．．．!?」

神「．．．．．」

．．．この状況、どうすればいいのだろうか．．．。なんていうか．．．緊張感のない人たちだなあ。なんて思っている私にもあんまり緊張感が無かったのは、この人たちのせいだということにしておこうと思う。いつもはもうちょっと緊張感あるよ。私は。

琉「だいたい志音!!お前はいつもいつも．．．!!」

璃「そうだぞ!!なんで俺たちに対してだけ妙に冷たいんだ．．．!?」

志「．．．．．ハア．．．」

琉・璃「．．．．．うつ．．．!!」

志音はしばらく双子の兄たちの話に適当に相槌を打っていたが、それすらも面倒になってきたのか一旦ため息を吐いてから．．．とても鋭い気を発した。

．．．．．さっきの比ではないくらいに。

気って意図的に出せるものの．．．?志音の発した気に、私も少しだけ息を?む。その気をもろに受けている琉音と璃音はたまらないだろう。

だがまあ、それも一瞬のことです．．．。志音はスーッとさっきまでの気を抑えて、私の方へと向いた。

志「ごめんね神音。兄さんたちはいつもこんなんだから．．．。とりあえず、神音と僕たちのことから話そうか。」

・・・さっきのはなんだったのだろうか。志音は天使顔負けの笑顔でそういった。

志「まず家族構成から、改めて整理してみようか。僕たちの家族は、僕に神音。そしてその双子の兄さんたちに、両親の計6人。僕と神音は双子で、僕が兄で神音が妹。そして見て分かるように、そこにいる琉音と璃音も双子だね。金髪の方の琉音が兄で、銀髪の方の璃音が弟。そして、僕たちのお兄さん。

母さんと父さんは・・・まあ、近いうちに会えると思うよ。これが僕たち“神”家。」

神「・・・こう・・・？」

志「そう。神音は今は神成という苗字だろうけど、ほんととは神なんだ。」

『神 神音』になるってことかな・・・？なんだか紛らわしい・・・。唯でさえ名前に『神』についているのに。がそう思っていたことが顔に出ていたのか志音たちに苦笑された。

琉「まああんまり深く気にするなよ？」

璃「そうそう。苗字が何になろうと神音は神音だしな。」

そういつて琉音と璃音はほほ笑んでくれた。まだ数時間しか一緒にいないのに、妙に落ち着くのはやはり血のつながった家族だからだろうか？・・・うつん。でもやっぱりおばあちゃんの傍の方が落ち着く。血なんてつながっていなくても、私にとっては本当の家族だったんだから。・・・だけど、少しだけならこの人たちに気を許してもいいのではないかと、心のどこかで思っている自分もいた。

志「とりあえず、話の続きを聞いてね？」

神「あ、ハイ……。」

志「他にもこの屋敷には僕たちの親戚がたくさん住んでいてね、その人たちも含めて僕たちのことを“神ノ一族”というんだ。」

神「かみの……？」

志「そう。そして“神ノ一族”は皆大きかれ少なかれ、“力”がある。……そして僕たち神家は、その中でもずば抜けてその力が大きいんだ。もちろん、神音。君もね。」

神「えっ。でも私、そんな力なんてっ……!!」

志「……心当たりはあるはずだよ。だけど、神音は自分の力を無意識にうまくコントロールできているため、力の心配をする必要はあんまりなさそうだね。それよりも、これから神音が生きていくうえで気を付けてほしいことがある。まず……

“神ノ一族”の敵に位置する“鬼ノ一族”のこと。」

神「鬼……の……？」

志「そう。鬼ノ一族。詳しいことはあまりわからないんだけど、敵なことだけは確かだから。」

神「……でも、その人達がどういう人たちなのかも分かりませんし……。」

私がそういうと、何故か志音は黙った。

……どうしたんだろう？

そう思って首を傾げていると、いきなり志音が先ほどよりも少しだけ低い声で私の名前を呼んだ。

志「……神音。」

神「……はい……？」

なんとかそれだけ言うことができた。しよばいとか言わないでほしい。本当に怖いんだから。私がそう思ってたちょっと顔をひきつらせていると、志音は笑みを深めた。・・・なんで笑顔の方が怖いのかは私にもわからない。

志「さっき言ったけど、せめて僕には敬語なしでお願いね。あ、あと僕のことは志音って呼んで？・・・僕たちは双子、なんだからさ。」

そういう志音の表情が、一瞬だけ曇った。

神「あ・・・ごめんなさつ・・・あ、いえ・・・ごめん・・・・・・？」

・・・私が何とかさういって、志音は苦笑しながらもほほ笑んだ。これは自然な笑顔だ。全然怖くない。その背景で、琉音と璃音は何やら驚き青褪めているが、そこはあえて口にしないようにしておこう。

さつきからこの双子・・・の兄、達が話に口出しすると、ほとんどの確率で話がそれているような気がするのだ。

神「それで。」

なので私は、二人が口出しをしてくる前に話を戻すことにした。

神「鬼ノ一族・・・には、何か特徴とかあるの？私、そんなこと言われたって見分け方なんて分からないんだけども。」

その私の意図をくみ取ったのか志音はほほ笑みながら、だが真剣に

話を進めてくれた。

志「うゝん・・・特徴というか・・・苗字、かな。」

神「苗字？」

志「そう。鬼ノ一族には、必ず苗字に“鬼”という字が付くから。

まあそれは僕たちにも言えることなんだけどね。特に鬼めくたにという苗字を持つ奴には気を付けてね。」

神「めくたに・・・？」

志「うん。分かった？」

神「あ、は・・・う、うん。」

それから私は志音に、この家のことをいろいろ聞いてみたが、結局ほとんどのことは教えてくれなかった。

・・・私の中には、いまだ解けぬ謎ばかりが渦巻いている。

そして数日が経った。あれから私はほぼ軟禁状態で、ほとんど外に出させてはくれなかった。でも志音や琉音・璃音だけは毎日来てくれて、次第に私と彼らは打ち解けていった。・・・だけど、私はそんな柔軟な脳みそなんて持ってない。未だに信じられないこともあるし、疑いたくなるようなことも少なくはなくて・・・。そんなことを考えても、もう保護者もなにもいない私にはどうしようもないことなのだろうけど。それでもやっぱり、住み慣れた家で過ごしていきたいと思う。そこで一生を終えたいと思う。

琉「神音ー！！食べ物持ってきたぞー！！」

神「あ、ありがと。」

璃「俺が食べさせてあげよっか？」

神「いやいい。」

なんか若干手遅れなような気もしないことも無いけど、完全にぼだされてしまう前に・・・ここを抜け出そう。

志「神音・・・何か企んでない？」

神「えっ、そんなことない、よ・・・。」

志「本当に・・・？」

神「う、うん。」

ヤバイ・・・志音は鋭いから、一緒にいるときは気をつけなきゃいけなかったんだ。それを言うなら琉音兄さん、璃音兄さんも相当鋭いんだけど・・・この人たちは多分気づいても何も言ってこないから・・・。

神「そういえば皆いつも来てるけど・・・普段は何してるの？」

琉「俺らは皆同じ高校に通ってるぞ。」

璃「神音もそのうち通えるようになるからな！！」

学校か・・・ん？学校・・・？そういえば・・・。

神「・・・あの・・・私が通ってた学校って・・・どう、なったの？」

私がそう問うと、なぜか皆ばつの悪そうな顔をして目をそらした。  
・・・もしかして・・・。

志「ごめん。先に言うておくべきだったよね……。神音の通つた学校には、もう退学届出しておいたんだ。」

神「でも……。誰が？」

志「神ノ一族を仕切っている奴ら。」

神「でもっ！そんなことが」

志「できるんだよ。そんなこと簡単にできるくらいの権力は持つてるから。」

権力つて、なにそれ……。やっとおばあちゃんの死から立ち直れてこれからって時だったのに……。そんな勝手に。このとき、私は誓った。やっぱり近いうちにここを抜け出そう、と……。ここにいろのはよくないと思うから。この気持ちだけはきつと変わらない。

神「はあっ……。はっ……。」

走つて、逃げて。

早く速く……。見つかる前に！！

月曜日。私は計画通りあそこから抜け出した。結局一週間たっちゃったけど、その分何度も練り直した計画は確実だと思う。もう走りすぎて、足の感覚なんて殆どない。けど、それでも。私は走ることに専念した。これからは運だけど……。泊まるところを探さなきゃ……。！！そう思って突き当りを曲がった時人にぶつかり、よろけてしまった。……。が、ぶつかってしまった人が支えてくれたおかげ

で、転ばずに済んだようだ。

神「すつ、すみません!!」

それだけ言つて顔も見ずに走り去ろうとしたが、それは腕をつかまれてできなかった。

「おいお前!! 待てっ!!」

そういつて無理やり私の顔を、自分へと向けさせた声の主はもちろんさつきぶつかってしまった人で。

栗色の髪に瞳の……。……。俗にいう、イケメンってやつで……。

その単語で志音やあの兄たちを思い浮かべてしまった私は、なんだか妙な危機感を覚えた。この人も、志音たちと同じなのではないかと。根拠も何もない、予感。だけど、なんだか確信に近いような……。背は志音と同じくらいだから、歳も近いんだろうけどこう……。志音とは違って本人も無意識なんだと思うけど気が……。少しだけ痛い。

「……。お前、名前は？」

神「……。つ、え？」

「だから、名前!!」

なんだかその強引さにむっと来た私は、今自分がどういう状況なのかも忘れて言い返してやってしまった。

神「あなたには関係ないと思います!」

「……。あ!?! なんだそれ!! いいから言えつつってんだよ!!」

神「~~~~つうるさい、です!!」

何この人なんでこんなに偉そうなの!? そう思ってまた何か言い返そうとしたけど、遠くの方から聞こえてきた声によって、現実・・・というか、今の自分の状況を思い出した。

琉「——!! かのーんっ!!」

璃「神音!! どこだー!!?」

聞こえてくる琉音と璃音の声・・・。やばい。ちょっと忘れていた。っていうか気づかれるのが思った以上に早いんだけど。

「この声・・・なんであいつらが・・・?」

神「・・・っ」

逃げなきゃ!! そう思って青年の腕を力いっぱい振りほどこうとしたら、少しだけバチッという音とともに電流がはしった。

神「・・・っ!?!? えっ?」

「・・・っお前、まさか・・・!!」

な、何今の・・・? 先ほどの光景に呆然としてしまった私は、直後込められた力に逆らうことはできなかった。

「おいお前!! こっちこい!!」

神「え・・・ちよつと・・・!!」

私は青年に引つ張られ、どこかへ連れて行かれた。

神「はあっ・・・はっ・・・」

「・・・お前大丈夫かよ？」

神「・・・大丈夫、です。」

正直言うと全然大丈夫ではないけど、目の前の息ひとつ乱していない青年を見ると素直にそう言うのもなんだか癪なので、あえて大丈夫だといいながら睨んだ。

神「あなたは・・・何なんでしょうか。いきなりお前呼ばわりした拳句こんな強引に・・・こんなところに・・・？というかここは何処ですか。」

「俺は・・・鬼めくたに月。ここは・・・俺の家の近くだな。」

神「・・・ぬくたに・・・？」

どこかで聞いたような名前に、自然と私の顔は引き攣った。なんでもりによつてこんな時に・・・？

月「・・・お前、神ノ一族の者だろ？しかも、あいつらのあの様子からして、結構高い身分の奴だよな。」

何故か確信したようにそういう目の前の青年に、少しだけ冷や汗が流れる。ぬくたにって・・・鬼って書いてぬくたにって読むんだよね・・・。だとしたらこの人、鬼ノ一族の中でも特別に偉い人なんじゃ・・・？

というか苗字も教えていないのになんでわかったの？志音たちが言っていた以外にも見分ける方法とかあるのかな・・・。

神「・・・そんなことはありませんよ。」

私は内心焦ってはいいたけれど、決してそれを表情には出さないように気を付けながらそういった。だいたいただでさえ驚くようなこと

ばかりだったのに、こんなことで驚いていちゃあこの先もやっていけないと思うんだ。

月「じゃあさっきのあれはどう説明するつもりなんだ？」

神「それは・・・見てわかりませんでしたか？」

どう見たって逃げていただけではないか、と。少しか皮肉を込めていつてみる。どうも私はこの人物に優しくはできないらしい。きっと第一印象が悪かったからだなそうに違いない。だけど目の前のこの人物はその皮肉には気づいてはくれなかった。天然？それともわざとかな？

月「・・・俺には追われているようにしか見えなかったけど・・・」

神「ならそうなのでしょう。いい加減もういいでしょう。私は急いでいるんです。」

そういつて私はさつさとこの場から離れることにした。この人とこうしている間にも、きっと皆は私を探しているんだ。

こんなところでもたついてなんかいられない。

月「おいっ待てよ！！」

そういつて腕を引っ張られそれは阻止された。

神「・・・っもう、なんなんですか貴方は！もう私にようなんて無いでしょう！？」

日頃のストレスが溜まりに溜まっていたからか、今日の私はありえ

ないほど短気なようだ。さっきからイラついてしょうがない。だから、もつと文句を言っでやろうと勢いよく鬼月の方へと振り向いた。・・・だけど私は、彼の方へ振り向いた瞬間声が出なかった。なにかされたわけではない。

月「なあ、俺のところに来ないか？・・・話が聞きたい。」

そういう彼が、あまりにも真剣な顔をしていたからだ。

・・・だからと言って、そんな彼の表情に一瞬でもときめいてしまったなんてこと、絶対にないけれど。

## 第二話 逃走先は敵地です

神「・・・絶対に危害を加えないと約束してくれますか？」

月「もちろん。・・・但し、お前が俺の一族になにか危害を加えようとすると遠慮なしに攻撃するからな。」

神「・・・分かりました。」

了承したのは、このままでもこの人はきっと引かないだろうと思ったからだ。・・・それに、こうしている間にも私を探している人たちがいる。きっと神ノ一族の人達に見つかったら私は速攻で連れ戻されるだろう。

・・・それだけは、嫌だ。

月「ついてこい。」

神「はい。分かりました。」

月「・・・後、敬語はいらない。」

神「っは、い？」

月「お前、俺と同じ年だろう。だから敬語はいらねえって言うてんだ。それと、おれの事は月と呼べ。」

神「はあ、分かりm・・・分かった。」

月「・・・。。。。。」

最後、敬語になりそうだった私に月は何が言いたげに視線を超越したけど、結局何も言わずに終わった。私があつたばかりの人に敬語なのはもはや癖みたいなものだし、しばらくは間違えそうになってみようがないよね。それより、この人の命令口調はきつともとか

らなんだな。敵意はほとんどなくなったけれどあつた時から変わらない口調に、私は漠然とそう思った。

月「着いた。一応裏口から入るからな。」

神「・・・分かった。」

“鬼ノ一族”の屋敷・・・そこは、神ノ一族たちが住む屋敷と同じくらい大きく、雰囲気もどこか似ていて・・・私には神ノ一族とどこが違うのか、全く分からなかった。そういえば、なんで神ノ一族と鬼ノ一族は敵対しているんだろう・・・？そう思いながら、私の前に行く『敵』の彼へとついていく。それが、神ノ一族への裏切りになるとかは考えない。だいたい私は、仲間になったつもりはさらさらないからね。・・・皆の私を見る優しい顔を思い出すと、少しだけ心が痛むけど・・・。。。。。。それでもやっぱり、ずっとあのままではいられない。

そうこうしている間に、何故か人気のないところへと入って行った。

神「・・・ねえ、どこに向かっているの？」

月「他の奴らに見つかったら何かと厄介だからな。とりあえずお前のここの滞在許可が下りるまでは、お前には一応離れの部屋に泊まってもらうつもりだ。」

神「ふうん・・・。」

ここでも同じ扱いになってしまふのかと若干不安になったが・・・それは突如私の目の前を歩いていた月がピタリと止まったことにより遮られた。

神「わっ、・・・な、何。どうしたの？」

月「・・・そういえばお前、学校には言ってるのか？」

神「え・・・行ってないけど。」



まあ、とにかく頑張つてほしい。これだけ自信ありげに大丈夫とか言つといて後で駄目でしたとか言われるのだけはやめてほしい。そんなことされたら多分というか絶対に怒る。普段あんまり怒らない人が怒ったら、なんか吃驚するよね。関係ないけど。

そんなこんなで、私はしばらくの間は外に出ることが内心少しだけ怖いこともあつて、この日はずっと外に出ないようにした。途中で月の言っていた鬼瀬さんがやってきたが、その人はとても優しいような感じの人で、一先ず安心した。そこらへんはナイス人選。

そして、夜。

何もすることがないから本棚にあつた適当な本を読んでいたら、数人の足音が近づいてくる音がした。ここは隠れておいた方がいいのだろうかと思い、息をひそめてどこか隠れられそうなところを探していたけれど、あいにく家具などのものが少ないこの部屋には隠れるスペースなどなかった。あたふたしている間にも、足音は近づいてきて・・・ちようど、私のいる部屋の前でピタリと止まった気がした。

・・・これは結構ヤバイ状況かも？

「おい、神音！部屋移動するからこつち来い。」

神「・・・っは？」

だけど、その心配は杞憂だったらしい。足音の正体は月と数人の知らない人たちで・・・見た限り、私に危害を加えるつもりはなさそうだ。あくまでも私の勘なんだけど。

神「いきなり何？」

月「お前の滞在許可取ったつつてんだよ。だからもつとちゃんとした部屋に移るぞ。もたもたすんなよ。早くしろ。」

そうして私は何かを言う間もなく月に強引に手を引かれて、さつきよりも広くて豪華な部屋に移された。っていうか本当になんなんだろう。私の意見は総無視？

月「まあ、座れよ。」

とか思っていたら移された部屋で説明をするつもりだったらしく、そこにいる皆が改まった表情になった。一気に緊張感に包まれた部屋の中でお前は何処のお偉いさんだと思いながらもそろそろと促された椅子に座り、私も例に倣って顔を引き締めた。

神「んで、だいたいの経緯を教えてくれる？結局私はどうなるの。」

月「ああ。さつきも言ったように、上からの許可は出た。いつまでも泊まって行けばいい。だが、いくつかの質問があるんだが……」

神「何？」

月「まず、お前は何故あいつらに追われていたんだ？仲間……なんだろ？」

神「……私には仲間とかよくわからない。いきなり現れて、気が付いたらあの……神ノ一族の屋敷に連れてこられていたただけだから。そりゃあ皆いい人たちではあったけど、家族とかいきなり言われてもやっぱりそんなの納得できないし。それに、若干軟禁状態だったし……このままじゃいけないと思って。だから逃げ出してきたの。」

月「……お前は、神ノ一族とか俺等のこととかわかってないんだよな。知ったのも最近なのか？」

神「うん。それまでは普通に暮らしていたよ。」

月「誰と？」

神「おばあちゃん。・・・義理の。」

月「そいつも神ノ一族の仲間なのか？」

神「それは分らない。・・・そのことを知っていたとは思うんだけど。」

そう。きつとおばあちゃんは私のことも神ノ一族のことも全部知っていた。・・・あの日、おばあちゃんが最後に残した言葉を聞く限りは。

『いいかいよく聞くんだよ・・・お前にはこれから苦しいことやつらいことがたくさん起きるだろう。だけど、それに屈してはいけな  
いよ。今のその心を失っていけない・・・大丈夫。お前には周りにたくさん支えてくれる人たちがいるよ。なぜならお前は。』

——唯一、神様の心を開いた“特別”な人間なのだから——  
『・・・』

その言葉の意味は、未だ分らないけれど。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4138y/>

---

神ノ音、鬼ノ月

2011年11月26日18時54分発行